



＜今月の1枚＞放課 GO!GO!
(フロアカーリングに挑戦)

字のない葉書

作家・脚本家の向田邦子^{むこうたくじこ}が航空機事故でこの世を去って、まもなく45年が経ちます。倉本聰・山田太一と並び「シナリオライター御三家」と呼ばれ多くの名作を著していますが、今回はその中から、エッセイ『字のない葉書』を紹介します。

＜表現は原文ママ、途中省略あり＞

終戦の年の4月、小学校1年生の末の妹が学童疎開をすることになった。あまりに幼く不憫だ^{ふびん}といってこれまで両親が手離さなかったのだが、3月10日の東京大空襲で、家こそ焼け残ったものの命からがらの目に逢い、このまま一家全滅するよりは、と心に決められたらしい。

妹の出発が決まると、父はおびた^{おびた}だしい葉書に几帳面な筆で自分宛の宛名を書いた。

「元気な日はマルを書いて、毎日1枚ずつポストに入れなさい」

と言ってきかせた。妹は、まだ字が書けなかった。

宛名だけ書かれた嵩高^{かさたか}な葉書の束をリュックサックに入れて、雑炊用のドンブリを抱えて、妹は遠足にでもゆくようにはしゃいで出掛けて行った。

1週間ほどで、初めての葉書が着いた。紙いっぱい^{かみいっぱい}はみ出すほどの、威勢のいい赤鉛筆の大マルである。地元婦人会が赤飯やポタ餅を振舞って歓迎して下さったとかで、カボチャの茎まで食べていた東京に較べれば大マルに違いなかった。

ところが、次の日からマルは急激に小さくなっていった。情けない黒鉛筆の小マルは遂にバツに変わった。間もなくバツの葉書もこなくなった。母が迎えに行った時、百日咳^{ひやくにちぜき}を患っていた妹は、虱だらけ^{しらみ}の頭で三畳の布団部屋に寝かされていたという。

妹が帰ってくる日の夜遅く、出窓で見張っていた弟が、「帰ってきたよ!」と叫んだ。

茶の間に坐っていた父は、裸足でおもてへ飛び出した。防火用水桶の前で、瘠せた妹の肩を抱き、声を上げて泣いた。私は父が、大人の男が声を立てて泣くのを初めて見た。

あれから31年。父は亡くなり、妹も当時の父に近い年になった。だが、あの字のない葉書は、誰がどこに仕舞ったのかそれとも失くなったのか、私は一度も見ていない。

【引用：「向田邦子全集〈新版〉第6巻」(文芸春秋、平成21年初版)

人目もはばからず「大人の男が声を立てて泣く」のはこういう状況かもしれないと納得した私があります。そして、子どもが発する重要なサインに、どうすれば気付くことができるのかを、私はこの作品からヒントを得たような気もしています。

生涯学習推進アドバイザー 小田島 数幸 (前砂川高等学校長)